

2003.6

新

歌人群像

野原水嶺

● 歌の鬼の道

● 時田則雄 ●



小田観螢に師事

歌の鬼と呼ばれた野原水嶺は、大柄で眉は太くて長く、眼光が鋭かった。それは関ヶ原の合戦で反家康の西軍に加担して敗れた宇喜多家臣の血を継ぐといわれる故か。

水嶺は一九〇〇（明治三十三年）十一月二十三日、岐阜県揖斐郡小島村で、父梅松、母うめよの長男として生まれた。本名、輝一。両親の間には、水嶺のほかに長女てつる、次男信一、次女きぬゑ、三女みつゑがいた。生家は稲や茶を栽培する中農。

八年間、首席を通して小島村尋常高等小学校を卒業した水嶺は、揖斐町棚橋私塾に入るが、間もなく最愛の母が三十九歳の若さで病没。大塚陽子（本名、野原陽子。水嶺の夫人）は「歌人野原水嶺」の中で、「水嶺は母の姿の中でも、茶摘みに行くのが一ばん好きであった」と述べている。「母の日に母を思ふに紺がすり茶つみの母のかならずみゆる」など、後年、水嶺は母を懐かしむ歌を多く詠んでいる。私塾時代、水嶺は母を失った悲しみの中、よく学ぶ傍ら、地元の詩歌同人誌「美友」に随筆などを発表。

一九二〇（大正九）年、一家七人は水嶺の



私塾卒業を待つて北海道十勝国芽室村久山に入植。理由は、母の医療費のために借金が膨れ、三度の食事にも事欠く状態になったからだ。当時の十勝は第一次世界大戦後の豆景気に沸いていた。梅松はその十勝で一旗あげようと決意したのである。しかし、入植地は熊笹が鬱蒼と茂る丘陵であり、開墾地は雨が降るたびに肥料分の流れる瘦地であった。住居はタンニン(五倍子)採取業者が捨てていった間仕切りのない十五坪(約五十平方メートル)の掘っ立て小屋だった。

こちらからも野火を放てばよろこびて
火はわが拓地一帯に燃ゆ 『本籍地』
神は不在の北限なればひとの妻をうば
ひきて移民の村おこしをり

昼夜開拓に汗を流した若き水嶺の野望が伝わって来る。特に二首目について、水嶺門下の市川よし子は「歌人野原水嶺」の中で、「二大開拓叙事詩」と述べている。しかし、水嶺の野望とは裏腹に困窮が続く、翌年十月、妹きぬゑが過労のために死亡。

一九二二(大正十一)年、水嶺は耕地を弟に譲り、芽室と隣接する大正村上帯広尋常小学校の代用教員となった。大塚陽子は「歌人野原水嶺」の中で、「農業がづらいとか、いやとかでなく、将来に見通しがない」、市川よし子は「離れざるを得ない立場に追いこまれた」と述べている。

同年、竹中蓉と結婚。翌年、手塩国上川郡下川尋常小学校に赴任。長男光雄誕生。この頃、「北海道教育」に短歌を投稿。選者は小田観螢であった。

三年後、小学校正教職員資格検定に合格し、石狩国空知郡金山尋常小学校に教諭として赴任。長女道子誕生。金山には「潮音」の俊英、山名薫人がいた。水嶺は若山牧水の自然主義詠に惹かれていたが、薫人の強いすすめで「潮音」に入社。小田観螢選で八首載り、心が躍ったという。ちなみに、投稿の際の号は北嶺だったが、誤植で水嶺となった。以後、水嶺は薫人宅の歌会には必ず出席した。そし

て生涯、薫人を歌の先輩と呼び続けた。一九二八(昭和三)年七月、帯広柏尋常高等小学校に赴任。次男英夫誕生。以後、水嶺は没するまでの五十余年間、教育の傍ら、十勝を拠点に積極的な作歌活動が続けることになる。

一九二九(昭和四)年一月三日、水嶺が中心になり、十勝公会堂で第一回十勝短歌大会が開かれた。この歌会は「辛夷」月例歌会として今も続いている。これまでに休会は終戦日の八月十五日のみである。八月、水嶺が中心になり「潮音」帯広支社結成。

翌一九三〇年五月、小田観螢を主宰に「新壘」創刊。水嶺も十五人の十勝勢と積極的に参画し、拡充強化に努めた。それは師観螢に寄せる深い思いと、作歌のための強い拠所が欲しかったのだろう。九月、十勝毎日新聞歌壇選者となる。

一九三六(昭和十一)年十月、弟信一病没。翌年一月、神奈川・鎌倉の円覚寺で開かれた第四回「潮音」大会に出席。夢にまで見た太田水穂に初めて会う。しかし、後年、水穂を批判した「潮音」脱会者の復帰を呼びかけ、しばらく出詠停止を言い渡されている。

一九四五(昭和二十)年、終戦後間もなく、長男光雄の戦死の公報が届く。「たたかいに

野原水嶺

1963（昭和38）年、帯広の隣、^{しももとふけすずらん}下音更鈴蘭公園の自身の第1歌碑の前で。歌碑は「大いなる踴躍の日あれかしわ葉のひかりと見えしづく肩うつつ」



ゆく日を待てる少年のわが家にありあさも夕も言ふ」。志願して征った光雄。それを力強く見送った水嶺。陸軍専任教官も務めた水嶺。その知らせは悲しく重く、心境複雑であった。

名伯楽水嶺

「辛夷」は一九四六（昭和二十一年）四月、渡辺洪の提唱で創刊され、水嶺は代表に就任。しかし、戦後の紙不足などにより、一年も経たぬうちに休刊。水嶺はガリ（がり版）を切

つて「辛夷通信」を発行し、会員の保持に努めた。復刊は一九五四（昭和二十九年）九月。この間、十勝では大森卓や舟橋精盛らの提唱により、超流派誌「山脈」が創刊されたが、

二年足らずで終刊。

水嶺は名伯楽と呼ばれ、中城ふみ子や大塚陽子ら多くの新人を発掘・育成した。ふみ子が初めて「辛夷」月例歌会に出席したのは一九四八（昭和二十三年）年。水嶺はふみ子の感性の鋭さに注目。ふみ子は「山脈」の歌会にも出席し、大きな刺激を受けている。第一回短歌研究新人賞は中城ふみ子と大塚陽子の二人が一位を競ったが、二人に応募をすすめたのは水嶺である。

ちなみに、塚本邦雄は一九八四（昭和五十九）年の角川の「短歌」十月号の「先駆酸鼻」で水嶺の歌を多くあげ、「これらが中城ふみ子の歌といかに関り合ふかは速断を許さない。だが、この時代に素樸な写実主義や、単純で固陋な私小説性を憎んで、脱出口を求めつつあつた歌人の姿が、ここに確かにある。中城ふみ子は一つの典型であり、彼女が生まれるための地盤・情勢・条件は、その陰でひそかに調へられつつあつた」と書いている。

一九六五（昭和四十）年、水嶺は大塚陽子との生活を公にする。同年、帯広市文化賞を受ける。

朱の落暉野火あとの空そのままにけぶ
れり十勝はばくばくとして
『幾山河』

この歌は一九七八（昭和五十三）年七月、水嶺十勝在住五十年を記念して狩勝峠山頂に建立された歌碑に刻まれている。水嶺にとつて十勝は故里の小島村よりも深い思いの刻まれた故里となつたのである。以後も、水嶺は「辛夷」代表として、「潮音」選者としての激務をこなす傍ら、旺盛な作歌活動を続け、一九八三（昭和五十八）年十月二十一日午前二時四十一分、多くの「辛夷」社友に見守られて永眠。八十二歳。安らかな歌の鬼の終焉であつた。

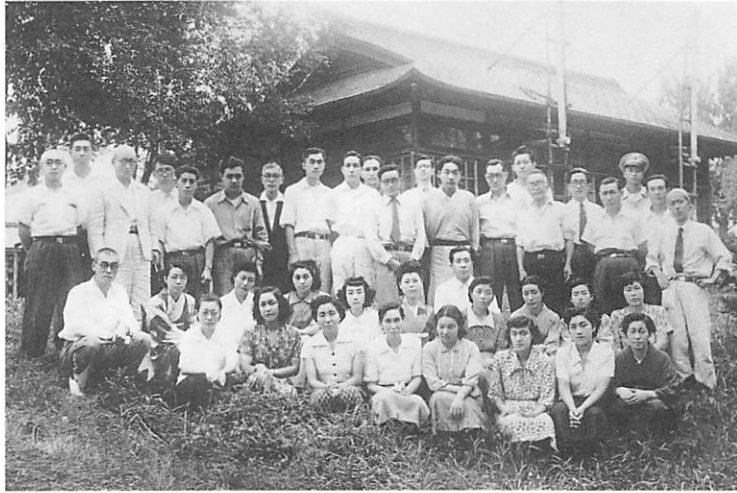
情念の北方詠

水嶺には五冊の歌集がある。第一歌集『花序』は、一九五二（昭和二十七年）年刊。

逆剥ぎに鱗はがるる幾年を経て来ぬさ
らにいくとせかへむ
溝の汚臭に馴れてしまへば惧ること
あらず情性の椅子にわが居る
雫二つあひ寄りふくれ極限にいたると
みればひらめきて消ゆ

序で小田観螢は前二首をあげ、「情感や意欲の陰翳がかなり濃く、自由なやうで節度が

1951（昭和26）年8月19日、歌誌「山脈」の大会。前列左の座っている1人目が野原水嶺、同、座っている8人目は中城ふみ子、後列に和服姿で立つのは舟橋精盛



あり、硬いやうで粘りがあり一本調子なやうで撓しなひもあつて時に、美意識として不調和に近い物を調和しやうとし、或あるひはまた、有り余る真実を以もつて、みじかい詩型の桎しご梏こに抵抗させてゐる」と述べている。

三首目は単なる情景描写詩ではない。「花序」の中では際立った一首であり、水嶺が、依頼された色紙や短冊に好んで書いた一首でもある。

『本籍地』は、一九六四（昭和三十九）年刊。四賀光子が序歌を二首寄せている。

移民地のわかきら巨樹を畏れねば斧に
倒し火をはなちては焼く

斧を樹にいきなり当てつ 移民われら
怒気のごときをいつも持てれば

一毛作の秋また凶し未付与地の盗伐を
しては米憎あがなふ

本集について大塚陽子は、「歌集が人生と
いうような面では、この歌集は壮年期」
と述べている。開拓期の歌が躍動する歌集。

『幾山河』は、一九七四（昭和四十九）年刊。

氷裂を湖に走らすことすでにほしいま
まなり春のかたちは

流刑さるるならば根室の氷原がふさは
し荒涼と月更けてきぬ

肉体にいまだ魂かへらねば 飛天の唇
かろくまなぶたは閉づ

近藤潤一は当時の「辛夷」に、「時には死
を凝視しつつ人生の微妙、不可思議相を垣かた々
と見遣り、なおかつ来し方を顧みて、わが身
わが性をいとおしむやさしさが、今度の集で
はひとしお印象に残った」と述べている。

『常緑樹』は、一九八〇（昭和五十五）年刊。

九万九千九百九十九個は無駄の種子赤
楡の種子は空暗くまふ

赤楡の種子の降る音霏々として雪のふ
る音夜の青あらし

赤楡の一樹が風に散らす種子数十万吹
雪となりてはなやぐ

水嶺は歌論集「散石集」の中で、「最近の
道内の短歌は殆どといってよい位、東京の尺
度で測ろうとしている。私らは北海道三世で
ある。風土性はもう身についた筈である」と
述べている。水嶺の根深い詩想を感じさせて
くれる歌集。

『道』は未刊歌集であり、水嶺の死の翌年に
出版された、『野原水嶺全歌集』に収録。

ふるさとの友はよきかな富有柿ぎしと
つめこみ送り来たりぬ

この脚を一步ふみ出すそこはもう違ふ
世ならむそれだけのこと

「ありがたう」繰り返すとも尽きざれ
ばつひの別れのわれとてさびし

最晩年、水嶺は極度の緑内障を患っていた。
口述した歌を大塚陽子が清書した歌も多く収
められている。

（ときた・のりお「辛夷」編集発行人）